

服飾に対する幼児の自我の発達(その1) — 幼児の被服に対する嗜好性—
昭和学院短大 ○長野智子 川田千恵 高野倉睦子 共立女大家政 小林茂雄

<目的> 幼児期は著しく心身が発達する時期であり、特に幼児期後期(3~6歳)は幼稚園などの集団の場により、知識が拡大し、自我が発達する。したがって服飾に対する関心も芽生えると考えられ、この時期の着衣被服が子どもの精神的発達におよぼす影響は大きい。子ども服の選択は主に母親の感覚が優先される。そこで幼児の被服に対する嗜好性、着用場面に対する知識などを調査し、幼児の被服に対する自我の発達について性別、年齢により比較検討した。さらに母親の幼児の色や柄に対する嗜好性の影響についても考察を加えた。

<方法> 千葉県の子園児 162名(男児80名、女児82名)とその母親を対象に、1993年10月に、幼児には面接調査を行い、母親には配票留置法によりアンケート調査を行った。調査内容は幼児には幼児自身の洋服の色やスタイルの嗜好、着用場面に対する知識、男児・女児に似合う色や柄に関する12項目、母親には幼児の色や柄の嗜好に関する4項目である。調査データは、好きな色や柄に対する母子間の一致性などについて解析した。

<結果> 幼児が洋服で好きな色は、男児では赤:17.5%、紫:16.7%、青:13.2%であり、女児ではピンク:46.5%が多くを占め、洋服で嫌いな色は、男児ではピンク:21.7%、黒:20.8%であり、女児では黒:36.7%が多くを占めていた。男児より女児の方が洋服の色について、嗜好の集中がみられた。着用場面に関しては、七五三で男児:70.0%、女児:84.2%が和服を選択しており七五三は和服のイメージが強い傾向にあった。幼児の洋服で好きな色に対する母子間の一致性では、男児より女児の方が高い結果となった。